

輝きを求めて 日本高純度化学 3  
心一つに上場つかむ オープンな社風が生きる

経営陣による企業買収（MBO=マネジメント・バイ・アウト）が決定、静かに祝杯を交わしてから、3年が過ぎた2002年12月、日本高純度化学はジャスダック上場を果たす。

一言で上場というが、そこにいたるまでの葛藤は言い尽くせない。そもそも「MBOでもなければ、上場など考えられなかった」（平岩武治専務）会社である。「全員がのびのびと自分の力を発揮している少数精鋭のサムライ集団。それだけに上場に耐えうる体制ではなかった」（内田薫経営企画室長）といえる。

だが、出資を仰いでしまった以上、なんとしても上場しなければならない。資金はキャピタルゲインを見込んで提供されている。同社の場合はその上、20億円余の“借金”も抱えている。取締役の4人は虎の子の定期預金や解約した保険金を出資している。会社との心中を覚悟の背水の陣である。

平岩専務は、「会社として20億の借金を背負ったことが重かった。とりあえず、10億を何とかしようと考えた」と述懐する。

そこから、同社の上場への取り組みが開始されたが、誰にも経験がない。そこへ実動部隊として出向してきた内田室長は、同社の実情を見て、逆に何でもできる面白さに引き込まれていく。渡辺雅夫社長は内田室長に上場に関する業務すべてを任せた。

「そこまでやらなくてはならないのなら、上場をやめればいいではないか」「本当に上場しなくていいのか。何のために人生を賭けたのか」といった会話が何度も交わされた。それでも時間は容赦なく流れる。

そのころ、内田室長は渡辺社長に無理をいって営業技術部のホープである前田淳係長を上場準備に借りる。人を抜かれる営業技術部は痛い、そこを「3ヶ月」と頼み込んだのである。7月、8月には内田室長と前田係長は上場準備のために会社に泊り込む日も多くなってきた。「ソファで仮眠していると、朝、起こされた」とような経験を積み重ねるうちに上場が射程圏に入ってきた。こうなると「上場しよう」と社員の一体感が醸成され、少人数でオープンな社風がプラスになる。スピーディーな判断とそれに合致した行動が取れるからだ。

「全員が日常業務にプラスして公開準備をした。全員がかかわったので、上場の達成感を共有できた。全員で成し遂げた価値ある上場」と平岩専務は評価する。

ジャスダック上場の挨拶広告は全員の集合写真を使用、上場記念パーティは社屋で開かれ、地元商店街から取り寄せた料理が並んだ。金融機関や取引先など、駆けつけた100人が31人の全社員を祝福した。

（ライター 片岡緑）  
月曜日に掲載